

アジア人の化粧に見られる身体観・身体表象とその変容についての研究 －身体装飾のアジア的伝統と〈化粧のグローバル化〉の狭間で－

東北大学大学院国際文化研究科

山下 博 司

目的・背景

本研究はアジア地域を中心とする化粧の文化論、あるいは身体装飾の思想研究を構想するものがある。アジア地域の「化粧における歴史的交流」の足跡をたどり、その背後にある思想や精神をていねいに読みとる作業を通じて、きわめて日常的な「化粧」という行為に潜む文化的・社会的意味を追究するコスメトロジー研究の一環として位置づけられる。アジアの化粧の背景に潜む思想や文化伝統を理解することは、脱宗教化した現代の化粧のあり方やトレンドに対して多くの刺激や示唆を与えることになるであろう。本稿では、グローバル化に起因する支配的トレンドを現実として踏まえつつも、なおも生きるアジア特有の傾向に光をあてることで、アジア人に特徴的な身体観や宇宙観に迫りたいと考える。

結果・考察

アジアの化粧法の特色をなすものとして第一に指摘できるのは「目の強調」である。現代のアジア女性の間で西洋の化粧法の影響が顕著であるが、本来は地域自生の植物成分や鉱物からの天然染料を効果的に用いて、目、唇、爪などを赤その他に染色・着色していたのである。「目の強調」は、アジア人の化粧にとって半ば本質的な意味をもっている。画一化された「目の強調」の技法によって、結果的に類似する印象を備えた顔貌を得ることになるが、そのことは化粧の目的や効果を減じたり損なったりするものではない。アジアの化粧は西洋のそれのような「個性」を標榜しない。「個性の発現」は期待されないのである。化粧の「仕様」が同じか統一されており、化粧の結果として個性的な美しさが引き立つというより、むしろ類似した顔つきになるのである。あたかも、理想とする、あるいは規範となる固定的な顔貌の心象があつて、それに似せるために敢えて化粧を施すようにすら見える。理想とする相好の概念が共有されている、と言い換えてもよい。

具体例を示そう。アジア、とりわけヒンドゥー化した南アジアや東南アジアで、女性の化粧の祖型としてあるのは超自然的存在、より具体的には「女神」のイメージである。インド女性は、女神のイメージに似せた化粧によって、個性がない同じ顔になる。そこには女神が女性の美しさの理想あるいは典型になっているという事情が伏在する一方、女神に関わる呪術性・宗教性も影を落としている。女神に自らを似せることによって自身と女神と一体になり、合体した女神のもつパワーを己のものとして神の加護を得るの

である。

化粧によって変身し、成り代わった他者（超自然的存在）の呪力を得るという発想である。化粧は人間が神あるいは神秘的存在になるための操作であり、その意味でまさしく「化ける」ための技法である。そこにあるのは「没個性化」であって、ナチュラルメイク云々の余地は存在しない。身体装飾によって「神的なるもの」と同一化を果たすという過程において、化粧は仮面とも軌を一にしている。こうした現象の背後にあるのは、アニミズム、シャーマニズム、トーテミズム等の原初的・普遍的な宗教形態である。没個性を指向する化粧の伝統は、神が憑依したり、聖なるものと一体化したり、最高実在と一つになるという、西洋や近東における神と人との関係からは導き得ないアジアに独特な宗教観念の為せる技ということが出来る。アジアにおいて化粧は単なる世俗的な行為ではないのである。

化粧には如上のような宗教性に加え、呪術性も指摘されなければならない。南アジア・東南アジア、さらに極東でも実践された眉間の斑点には、本来招福除災の意味づけがある。

このような発想は、化粧とはある意味で矛盾する行為—身体を敢えて汚すこと—をも説明する。インドで赤子の頬に煤を使って大きな斑点をつける習俗があるが、美しい子供への悪魔の興味をそらせる意味合いがある。「化粧」とは真っ向から対立するように見える〈顔を汚す〉という行為が、「呪術性」という意味で化粧と軌を一にしているのである。

以上のことから、アジアにおける化粧ないし身体装飾の顕示的性格は明らかである。変身しなくてはいけない以上、あるいはわかってもらわなくてはいけない以上、化粧した事実が目立たなくてはならないのである。化粧を施した事実が隠匿される「ナチュラルメイク」ではなく、作為性・虚構性が明らかであって構わないし、むしろ誰の目にも明らかである必要があるのである。アジア人にとって化粧による虚構性が露わになること、顕示的であることに抵抗を覚えない背景には、上述のような根本観念が伏在している。

アジア人の「化粧」は単なる化粧ではない。そこには、美的観念だけでなく、人々の日常の営為の総和としての伝統的な神観念、身体観、世界観が色濃く反映されている。